

# 経口避妊薬服用後の妊娠に関する疫学調査

京都府立医科大学産婦人科学教室

岡田 弘二・東山 秀聲

## 1. 研究目的

経口避妊薬（ピル）服用婦人は、わが国では約50万人にのぼるともいわれている。しかもピル服用婦人は生殖年齢層にあるもので、したがってピル服用婦人が服用中止後に妊娠した場合に、ピルの服用が児に及ぼす影響を検討し、その因果関係を明らかにすることは極めて重要なことである。本研究はこの主旨に沿って行った臨床的な研究である。

## 2. 調査方法

各種の経口避妊薬を服用した婦人のうち、服用中止後に妊娠し、その後分娩に至った症例につき回答をえた9機関からの170例と、各妊娠例の年齢と経産回数とマッチさせた同数の対照を基にして分析を行った。

## 3. 調査成績

### (1) ピルの種類

使用されたピルは、薬品名が判明しているのは10種類であるが、記載漏れ、または不明例が107例、62.4%もあったため、使用されているピルの種類の動向は判然としなかった。

### (2) ピル服用期間

今回妊娠の成立前のピル服用期間は表1に示した。服用期間が5周期以内のものが64例と最も多く、次いで12～23周期服用の35例であった。服用期間が比較的長期である12周期以上の症例が57例、比較的短期の12周期未満のそれは94例であった。

### (3) 妊娠までの期間

服用中止から妊娠までの期間、服用中の妊娠例1例を含めて中止後3周期以内の妊娠例が48例と最も多く、各期間にわたり分布していた。服用中止後12周期以上経過して妊娠したものは88例、12周期未満のそれは37例である。

### (4) 分娩時期と妊娠までの期間との関係

服用中止後、今回妊娠の成立までの期間を3周期以内と4周期以上の2群に分け、早産（満28週～満36週）、正期産（満37週～満41週）および過期産（満42週以上）との関係を検討した。ピル投与中止後1～3周期では

月経周期が延長するものが多いことから<sup>1)</sup>、見かけ上の過期産が増加するのではないかと予想されたが、今回の調査からはそのような傾向は認められなかった。

### (5) 周産期死亡と奇形

ピル服用歴を持つ婦人からの出生新生児数は169例であるが、うち1例は出生168時間以内に死亡している。これとは別に、妊娠29週における子宮内胎児死亡が1例に認められているが、その原因は明らかではない。

アプガル・スコアは出生新生児のすべてが7点以上であった。

新生児の奇形は、ピル服用歴の婦人からの新生児では唇口蓋裂が3例、性器奇形1例、動脈管開存(PDA)1例の5例であり、奇形率は5/169 (2.9%)である。一方、対照からの新生児数は双胎例が含まれていたから171例で、奇形は動脈管開存が1例認められ、奇形率は1/171 (0.6%)となった。

また、新生児の異常徴候の出現は、ピル服用歴婦人からの新生児では総ビリルビン (15mg/dl以上) 値異常例が4例、異常嘔吐が4例であり、対照群からの新生児では総ビリルビン値異常例が5例、異常嘔吐が2例、メレナ1例、心拍異常が1例にみられた。これらの成績から、新生児の異常徴候の出現には両群の間には有意差は認められなかった。

なお、出生新生児の性別は男児84例、女児86例である。

次に、ピルの服用が新生児の生下時体重に対し、どのような影響を及ぼすかを分析した結果、以下のような成績となった。

### (6) ピル服用と低体重児、巨大児

低体重児は5例、巨大児は4例が認められたが、両者ともピル服用期間の長短によるその出生頻度の差は認められなかった。

ピル服用中止後の妊娠成立までの期間と低体重児または巨大児の出生との間にも一定の傾向はみられなかった。

### (7) 母の年齢と生下時体重

新生児の生下時体重を母親の年齢層別に分類したの

が表 2 である。母の年齢は 25～29 才の群が最も多く、次いで 30～34 才の群である。経産回数をマッチさせた対照群と、ピル服用群の間では、各年齢層とも生下時体重には有意差は認められなかった。

#### (8) 妊娠成立までの期間と生下時体重

ピル服用中止後から今回妊娠の成立までの期間と生下時体重との関係を示したのが表 3 である。ここに示した成績から、ピル服用中止後から妊娠成立までの期間によって、新生児の体重は何ら影響を受けないと考えられた。なお、ピル服用中に妊娠成立がみられた症例においても、生下時体重は 3,300 g であり、また外表奇形も認められなかった。

#### (9) 胎盤重量

各年齢層と胎盤重量との関係は、ピル服用歴をもつ婦人と対照との間には、有意な差は認められなかった。

次に、服用中止から今回妊娠成立例を含めて妊娠成立までの期間が胎盤重量には影響を与えないと考えられた。

### 4. 考案ならびに結語

ピル服用中止後の早期の 1～3 ヶ月は、既述のように月経周期が不順となることが観察されている。そしてことに卵胞期が延長し、これによる変性卵の受精など異常内分泌環境下における妊娠により、児の奇形やその異常の出現が懸念されている。

ピル服用中止後に妊娠が成立し、今回分娩に至った 170 例につき、ピル服用と胎児障害との関連に関し分析を行った結果、ピル服用期間の長短、あるいはピル服用中止から妊娠成立までの期間のいずれもが胎児障害をもたらすことを示唆する成績はえられなかった。ピルに含まれる性ステロイドの含有量が大きくある薬剤は、投与中止後の性機能の回復が小用量のピルと比較して遅れることが知られている<sup>2)</sup>。したがってピルの種類による胎児への影響も懸念される。しかし、今回の調査では使用されたピルは 10 種類であり、大用量剤の使用例もかなりあったが、記載漏れないし不明が半数を超えていたため、分析ができなかった。ピル服用後の妊娠による胎児障害の発生、とくに児の催奇性の問題は、なお多数の症例を集めて分析し、論ずる必要があると考えられる。

### 5. 資料提供機関

北海道大学・山形大学・東北大学・福島医科大学・東京大学・金沢大学・京都大学・広島大学・京都府立医科大学 (各産婦人科)

### 6. 文 献

- 1) 岡田弘二, 東山秀聲: 経口避妊剤服用中止後の性機能, *Sexual Medicine*, 3:33, 1976.
- 2) 東山秀聲: 経口避妊法の変遷, *産婦進歩*, 26:333, 1974.

表1 ビル服用期間の分布

期 間(周)	症 例 数	低体重児 (2500g未満)	巨大児 (4000g以上)
1 ~ 5	64	2	1
6 ~ 11	30		
12 ~ 23	35	3	1
24 ~ 35	14		
36 ~	8		
不 明	19		2

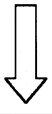
表2 新生児の生下時体重

年 令	経口避妊薬服用婦人 (g)	対 照 (g)
20~24	3010.2 ± 108.0 (22)	3030.4 ± 117.9 (23)
25~29	3143.4 ± 53.2 (92)	3158.4 ± 37.9 (95)
30~34	3295.2 ± 53.4 (49)	3173.7 ± 52.9 (49)
35~	3090.0 ± 211.2 (5)	3248.3 ± 116.0 (6)

Mean ± SE ( ) 例数

表3 服用中止後妊娠までの期間と  
生下時体重ならびに胎盤重量

期 間 (周)	例 数	新生児体重	胎 盤 重 量
服 用 中	1	3300	490
0 ~ 3	47	3205.2 ± 45.5	557.1 ± 15.4
4 ~ 6	28	3109.4 ± 105.2	557.3 ± 25.3
7 ~ 11	12	3298.8 ± 139.5	531.7 ± 26.4
12 ~ 23	21	3052.4 ± 78.2	582.5 ± 29.8
24 以上	16	3136.6 ± 109.7	533.5 ± 15.6



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 1. 研究目的

経口避妊薬(ピル)服用婦人は,わが国では約 50 万人にのぼるともいわれている。しかもピル服用婦人は生殖年齢層にあるもので,したがってピル服用婦人が服用中止後に妊娠した場合に,ピルの服用が児に及ぼす影響を検討し,その因果関係を明らかにすることは極めて重要なことである。本研究はこの主旨に沿って行った臨床的な研究である。